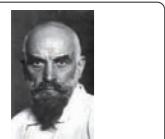


- ・プラトニエの勧めで建築に目覚める
- ・ヴァナキューな表現の住宅を設計

コルビュジエの師たち



□Charles le Pratener(瑞)
???-???

コルビュジエの学生時代の師。建築の道を勧められ、处女作であるファレ邸の施主を紹介した。



□Peter Behrens(独)
1868-1940

ドイツの建築家。ドイツ工作連盟に参加。グロビウス、ミース、コルビュジエといった後に近代建築の巨匠となる建築家が在籍していた。



□Auguste Perret(白)
1874-1954

フランスで活躍したペルギー出身の建築家。コンクリートの父と呼ばれる

- ・白の箱の時代
- ・活動の拠点をパリに移す

『エスプリ・ヌーボー』共同創刊(1925年発刊)

1920

ビュリスムと現代性の美学を広め、初めてル・コルビュジエという名前を使い、メディア自らの宣伝活動に巧みに取り入れた。



□Amédée Ozenfant(仏)
1886-1966

フランスのキュビズムの画家



□Paul Dermée(白)
1886-1951

ベルギー出身の詩人、作家

- ・白の箱からの脱却
- ・都市計画への注力
- ・簡易住宅プロジェクトに対する関心
- ・ヴァナキューな表現への挑戦

コルビュジエの協働者



□Pierre Jeanneret(瑞)
1896-1967

スイスの建築家でコルビュジエの従兄弟。1922-1940年コルビュジエと協働。最大のパートナー。



□Charlotte Perriand(仏)
1903-1999

フランスの建築家、デザイナー。1927年コルビュジエと協働。



□Jean Prouvé(仏)
1903-1999

フランスの建築家、デザイナー。コルビュジエと協働。

- ・公共事業の実現

丹下健三

大高正人

鬼頭梓

芦原義信

室伏次郎

池辺陽

象設計集団

内藤廣

福田玲子

日本人の弟子



□前川國男(日)
1905-1986

日本の建築家。コルビュジエに師事



□坂倉準三(日)
1901-1969

日本の建築家。コルビュジエに師事



□吉阪隆正(日)
1901-1969

日本の建築家。コルビュジエに師事

Behrens の弟子



□Mies van der Rohe(独)
1886-1969



□Walter Gropius(独)
1883-1969



□Le Corbusier(瑞)
1887-1965

コルビュジエ初期の住宅



ファレ邸(1907)



シュトゥッター邸(1909)
コルビュジエにとって初めての鉄筋コンクリート造(鉄筋コンクリートのフレームの間を煉瓦で埋める工法)の住宅で、単純化された古典主義と、東方旅行や同時代の建築から得た豊富な語彙の集成である。
しかし、建設費が契約前の見積もりの倍以上の金額になり、訴訟を起こされる。これはコルビュジエがスイスから去るきっかけになる。



ジャクメ邸(1909)

La Loche(瑞)



スイスの銀行家。コルビュジエの活動を資金面で支えるパトロンであった。



1923 ラ・ロッシュ＝ジャンヌ邸
コルビュジエがビュリスム的な純粹幾何学の精巧な構成をピロティ、連続水平窓、屋上庭園など新しい建築言語によって結晶化させた初めての例。また、はじめて住宅にスロープを用いた。

La Loche(瑞)



□ヴァイセンホフのジードルング
1927

1925年、ドイツ工作連盟が産業を通して芸術の復興を目指そうと、ヴァイセンホフにて2番目の国際展を開催。連盟長のミースによってコルビュジエ、ベーレンス、グロビウス、タウト等が参加。RC造によつて「ドム・イノ住宅」と「シトロアン住宅」を基本としており、コルビュジエがこれまで用いてきた「新建築の5つの要点」を極めて明確に表した

スイス学生会館
1933

ギーディオンらの推薦を受けて設計したスイス人の学生寮。
ピロティの柱は「犬の骨」の形をした彫刻的な造形で、その量塊性はのちのブルータリズムに通じる。

マルセイユのユニテダビタシオン
1952

コルビュジエのフランスにおける初めての公共事業。
個人・集団の問題の一つの回答であった。今までの実現しなかった都市計画や建築案で考えできたことをこのユニテで実現した。

対照的な二つの宗教建築



□ロンシャンの礼堂
1955

戦争によって破壊された石造りの礼堂の復活のためコルビュジエに設計の依頼が来る。戦争時に破壊された石造りの礼堂のその石を再利用し、石積みにモルタルを吹き付けて全体を石灰で白く仕上げた。コルビュジエはここで「造形上の音響学」とでも言われるものをめざした。また、内部に光と影の交響曲を実現させた。

チャンディーガルの計画

マイヤー、ノヴィッキから事業を引き継いだル・コルビュジエは、CIAMの都市計画の原則に沿つたモダニズムの都市を計画した。ゾーニングに関する限り、都市機能を擬人化して配置した。また、道路に8段階の順列をつけ、歩道と車道を分離し歩行者用の道路網を計画した。

1952年ル・コルビュジエの第1期計画の設計案が決定し、人工湖のほか29の長方形セクター(住区)からなる人口15万人の都市建設を日ざした。



1955年チャンディーガル高等裁判所



1958年チャンディーガル合同庁舎



1964年チャンディーガル議事堂

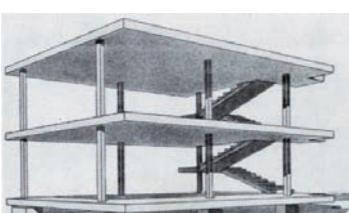
影響

住宅構成のプロトタイプ



□東方への旅
1911

中東、バルカン半島、ギリシャ、イタリアを巡る→これ以後の設計は一変して古典主義の影響を示す



□ドム・イノ住宅
1914

第一次世界大戦によるフランドル地方の荒廃をきっかけとして、LCIは量産を軸とした鉄筋コンクリート構造のシステムを考案する。都市計画家トニー・ガルニエの「工業都市」を視野にいながら、技師マックス・デュボワの協力を得て生まれたのが「ドミノ・システム」である。これは水平の層をつくる床面とそれを支える柱、階段からなる鉄筋コンクリートの構造ユニットで、荷重を支える役割から解放された壁が、自由な平面・立面計画を可能にするという画期的な案であった。彼はこのシステムによって、住居(ドムス)を「ドミニ」のように隣り合わせで規則的に連結でき、経済的に都市を再建できるものと考えた。



□シトロアン住宅
1920,1922

大量生産を意図したコルビュジエの住宅のプロトタイプの一つ。
全ては自立した矩形の箱で、正面は工業製のサッシ、側面は主として開口がない壁である。
ヴォークルソンの住宅やオザンファンの住宅などに応用されたのははじめ、1922年「300万人のための現代都市」と共に提案されたように、その後の都市計画の中でも集合住宅のプロトタイプとして実現されることになる



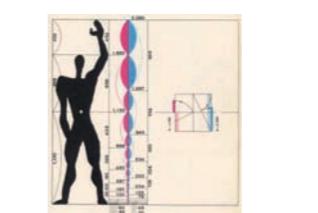
□建築をめざして
1923

『エスプリ・ヌーボー』誌で掲載した記事をまとめたもの。
「住宅は住むための機械」、「平面(プラン)の重要性」、「形態は機能に従う」等の刺激的な文章を書いた。



□輝く都市
1930

コルビュジエは人口過密で環境の悪化する近代都市を批判し、1922年「300万人の現代都市」、1925年「ヴァイセンホフのジードルング」、1930年「光辉都市」などの計画案を発表した。1933年CIAMで採択された「アテネ憲章」は「光辉都市」の理念に沿つたものだった。高層ビルを建設し、オープンスペースを確保し、街路を整備して自動車と歩道を分離し、それに基づいて都市問題の解決を図ろうと提唱した。当時のフランスでは異端とされ、受け入れられなかつたが、マルセイユのユニテは「光辉都市」論の実践の一つである。



□モデュロール
1945-55

建築はそもそも人間のための空間であり、自然界から生まれる美しい比例を実感できるものである。それに相応しい尺度が必要だという発想からコルビュジエは「モデュロール」の研究を始めた。
人間の寸法と黄金比(1:1.618)、およびフィボナッチの数列の組み合わせ。比例を導入することは調和をもたらすことであり、この統一は人体寸法とその周辺との調和した教学、宇宙を支配していると考えた。この発明以来、コルビュジエは設計にモデュロールを駆使して建築空間を作ろうとした。マルセイユのユニテは最も早い例であった。

